

昭和66年2月1日 第三種郵便物認可
平成18年5月1日発行 一冊月一回 一日発行
俳句雑誌 沖 第五巻第5号



俳句雑誌[おき]

5月号

沖 発行所

調 弦

能村 研三

現場主義

四月の人事異動で、三年間勤めた文化振興財団の館長の職を退任した。三年間という短い時間ではあったが、文化の現場の最前線で仕事が出来たことは私の人生でも有意義な事であったもともと私は土木技師として役所に入り単なるデスクワークではなく現場を歩き来しながら設計監督をしていたので、じつと机に座っているのが嫌いであった。

そんなことが文化の面でも役に立つとは思いつかなかったが、音楽の分野でもNHK交響楽団をはじめ在京の一流オーケストラの殆どの事務局を訪ね、単なるおざなりの企画を買ってくるだけでなく、直接演奏家とも話す機会を得て、地域にあった企画創りもすることが出来た。若いころから、オーケストラの演奏を聴くことは好きであったので、こんな仕事で自分自身の手で出来ることに興奮を覚えた時もあった。企画が当たりホールが満員になって、帰る際の客の満足した顔を見るのも嬉しい

伊根の舟屋

出 払 ひ し 舟 屋 の 軒 の 春 時 雨

春 み ぞ れ 舟 屋 そ び ら の 家 紋 か な

春 な ら ひ 舟 屋 舟 屋 の 路 地 を 漉 く

鯖 街 道 朽 木 を 越 え て 雪 ね ぶ り

*1*2 道賢の地名 *2 哥解の頃七立つ風

口能登 正覚院

春波を殊に鎮めし開眼経

春潮や能登の表裏に句碑二つ

うららけし父が私淑の気多に句碑

雪嶺にまなこ休まず手職かな

館長退任

リラ冷や劇場囲む列につく

調弦を了へ惜春の大ホール

ことであつた。

文化会館の他にもホールやギヤラリーなど十の文化施設を同時に抱える現場で忙しかつたが、途中からはギヤラリーが新設されることになって、全くの素人が企画から展示作業広告宣伝活動などを見よう見真似でやったこともよい経験になつた。

俳句を作つていく上では、単に文芸の世界だけに留まらず、音楽や美術のことなど広範囲に学ばなければならず、一流の芸術家たちと膝を交えて話すことができたことは大きなプラスであつた。

四月からは役所に戻つて引き続き文化行政に関わつていくことになるが、今度は文学館建設に向けた仕事なども大きなテーマとなりそうだ。



研三

仄じろ波

林 翔

登四郎句の切字

青天に白を打ち上げ梅ひらく

白波も仄じろ波や夜の朧

ちらつきし春の雪追暎が昇る

仏供抱く指に吹きつけ彼岸西風

「切字きりじに用る時は四十八字皆切字也」(去来抄)は芭蕉の名言であるが、切字の代表的なものは、やはり「や・かな・けり」であろう。しかし「や・かな・けり」を多用すると句形が古くなると、言つて、登四郎氏は、これらなるべく使わないように心掛けていた。「沖」創刊時を含む第四句集『民話』で調べると、比較的が多いのは「や」で、32句に用いられているが、「けり」は8句、「かな」は3句と、極めて少ない。

しかし最後の句集となった第十四句集『羽化』では違ふ。一期の終りが近づいた事を感じた登四郎は、主義主張にこだわらず自然体で詠んでいる。そうすると「や・かな・けり」も自然に多くなつていったのだと思われる最も多いのが「けり」で、58句に用いられ、次が「や」で48句に用いられ、「かな」でさえ37句に用いられている。

水 漬 の 塩 味 よ し や 春 北 風

春 外 套 着 て も 曲 線 を と め の 美

紅 白 梅 眺 む る 至 福 い つ ま で ぞ

散 紅 梅 風 と 遊 ぶ よ 二 階 ま で

厚 着 し て 人 は 行 き 交 ふ 初 桜

千 人 の そ ぞ ろ 歩 き よ 花 そ ぞ ろ

古典俳句をはじめ現代俳句でも多く用いられる「や・かな・けり」は自然と身にしみついている意識して使うまいとすれば、推敲の過程で他の表現に置き換えられるのだが、自然体に選った最晩年では、ごく自然に、そのまま表現されてしまったのである。

『民話』より

白桃をすすするや時も豊満に

元日の歳初の客の暗闇かな

悲母の一燈秋風に灯りつづけけり

『羽化』より

残菊や老いての夢は珠のごと

白絣着やすきほどの黄ばみかな

生御魂とはわがごとく気付きけり

林 翔



蒼茫集



発 泡

上 谷 昌 憲

発泡のさま満開の梅大樹
外濠に月の貼りつく寒戻り
あかときのビルの返照うすごほり
盛り塩に指の痕ある余寒かな
年寄りが年寄りを誉め桃の花
この町のなけなしの森囀れり

空いろに

辻 直 美

初ざくらいま乾坤のひとしづく
三月や炎上のこと産みしこと
空いろに雲をふちどり春といふ
朧夜の骨透けてゐる一夜干
紅梅や枝の先までおしやべりな
冬季五輪了ふ蜂蜜の糖化して

水 陽 炎

松 本 圭 司

異次元へ行けさうけふの水陽炎
眼帯の目に悦惚と春日透く
落椿赤き水尾ひき流れけり
墓穴を出でて空気のよどみたる
安房朧貝を焼く香が戸口より
雅かな紙雛となる手漉き和紙

夕 遍 路

渡 辺 昭

倒立の尾の水しぶき春の鴨
滝音を離れてたどる雪間かな
躓きしものに合掌夕遍路
水音に凜と色たて葉ゆる
身になじみ老を養ふ春毛布
手をまはし幹よりこだま芽吹き急

栞

北川英子

花菜みち貝殻みちを夕日まで
明日からの半農支度舳挿して
駘蕩と胎内ごこちこんなかも
春愁や栞いつまで宇治十帖
見舞帰り遊糸まつはる後ろ髪
春の夢なんと未婚の我が居て

風 船

辻 美奈子

風船の内部の健康な空気
草田男の筆跡つよし春の雨
をさなごは董のやうにはにかみぬ
忘れ霜乳離れの子をすこし恋ひ
下の子は待たせてばかりサイネリア
つちふるや大地腹式呼吸して

するする

千田百里

鎧戸のするする春の花舗となる
はたとせのいよよ多彩に木の芽張る

祝・神奈川支部二十周年

春愁や四十五度のお辞儀して
下萌や熔岩措く伊根の千枚田
送水会三千の炎のひと炎われ
さば街道難所の宿の雪解水

知 恵

荒井千佐代

げんげ田に風や赤子の耳朶透けて
さへづりや雨の乾きし波殺し
廃船の上に廃船春オリオン
潮鳴や針納むるも祈りつつ
涅槃図に夜半の波音近づき来
ものの芽や眠りて知恵を授からむ

黙 契

秋葉雅治

声上げて空刺す勢ひ辛夷の芽
黙契の学園句碑一周年いよよあたたか三師の碑
春あけぼの船屋を出づる水脈白し
逃げ込める逃水追うて隧道へ
悪役にしては律儀に春の風邪
す糸大河なす小流れの雪解水

潮鳴集



管 樂 器

山田三江子

冴返る耳のかたち
の管楽器
銀紙のふるへるやうに
三月来
俎板にみどり染みぬる
雛まつり
吹き足して紙風船をたたみけり
倒木の内より朽ちる蝶の昼

弥 生

掛井広通

ふんはりと日本を乗せて春の海
親指を隠せば拳弥生来る
薄氷を割つて角膜透きぬたり
春の日の水輪は言葉湛へをり
鶯餅鳴かねば少しつづくなり

朝 桜

川嶋一美

お下がりにアイロン効かす朝桜
辞書の名に苑や林や水温む
陶雛ふくよかに衣着たまへり
靴下の下草まみれ進級す
紅梅に母白梅に父佇たす

白鳥守の小屋

勝田公子

世界地図ひろげ白鳥守の小屋
走り根の脈打つ杜の牡丹雪
老梅の幹に気力のくねりかな
残雪を蹴る太脚の牧の馬
啓蟄や晴れてうする空の色

沖作品



能村研三選

東京

菊地光子

埼玉

服部 早苗

市川

代田 幸子

神奈川

大森 春子

立春や背中合はせの駅の椅子
春昼や木彫の熊の赤き口
手を添へて歩まず一步梅ふふむ
お湯割の寸胴グラス余寒かな
耳聡し五瓣椿の落つる夜は
手紙いま読まるる頃か梅真白
立ちてすぐ余寒の座るパイプ椅子
春は曙あけぼの色に児の歩む
雪解川活断層に浸み入るか
待ちまちてシンバルを打つ春一番
雪を呑み大河音なく渦なせり
料峭の雲充ちてをり烏帽子岩
竜天に登る勢ひに足場組む
春灯さらりと重きことを言ふ

茨城

内山 花葉

千葉

大沢美智子

ボス猿の尾を立てとほす春一番
雛店の遠くの町へゆく荷物
野火打ちし夜の深さやとりけもの
伊予柑のしぶき空気を押し上げて
寝足らへるこち涅槃図押しけり
指紋みな横に流るる涅槃西風
ルネッサンス掲ぐ帆柱春の海
南仏の旅信に春の虹立てり
梅が香やS字にのぼる美術館
携帯のライト点滅合格す
ふりむけば団塊世代青き踏む
啓蟄やきらきら殖ゆる嬰のことば
立春の水に手のひら魚となる
爪先に湧きくる鳥語末黒尾根

